

Eureka VII

六年制通信 No.14 令和2年8月28日(金)号

カタツムリ

誰が計算したのかカタツムリの進む速度は人間の千分の一だそうです。ほんとかいな。皆さんも「距離＝速度×時間」という公式を知っているでしょう。人間の移動する距離をカタツムリは千倍の時間をかけて進むということですね。カタツムリにもっと速く動けというわけにはいかないので、短い距離であっても移動には時間がかかります。しかし時間をかければ人間と同じ距離を進むことができるというわけですね。カタツムリがスカイツリーに登ろうと（思うわけないでしょうが）すると、問題になるのは速度ではなくて時間だけということが分かります。速度が0にならない限り、どんなに遅いカタツムリでもいずれ頂上に到達できます。カタツムリと言えばマハトマ・ガンジーが「善きことはカタツムリの速度で動く」（英語では *Good travels at a snail's pace.*）と言っています。これはイギリスのインド支配に対抗するスローペースのデモ行進を指して言うのですが、私たちの勉強にも、大きく言えば人生そのものにも当てはまることかもしれません。小さな歩みも長く続ければ、長い距離を歩くことができる。大きな歩みで進むあまり途中で挫折するよりは小さな歩みを続けなさいと、こういう教えは古今東西至る所にありそうです。ということは、よく考えるとこのことが大変難しいということの証左でもあります。誰もが普通にできることはわざわざ言いませんからね。古来私たちに伝えられてきた言葉は、諺一つ取り上げてみても、真理を伝える面も当然多いでしょうが、その裏にある人間の本能的な部分が見え隠れします。例えば、「職業に貴賤なし」という言い方も、本当に誰もが職業には貴いも賤しいもないと感じているのなら決して現れない表現です。私たちは職業には貴賤があると昔から思ってきたのですね、きっと。その心を戒めているわけです。

そう考えると「小さな歩みを…」とか「継続は力なり」とか君たちが何度も聞かされる単純明快なフレーズ（説教？）、そんなことはわかっていると誰もが思いながら何度も繰り返される言葉は、実はそのことが私たちには難しいということを示しているのです。三日坊主には、なれと言われなくたって誰でも簡単になれるますが、カタツムリの如く歩めと言われると長続きしない。これも人間の弱さだね。

その弱さの原因は、私たちがすぐに結果を求めるからだとは思いますが。私たちが高い山の頂上を目指して登山を始め途中で挫折した場合、多くの人は歩き方が悪かったとか、体力がなかったからとか、何通りもあるであろうルートを選択が悪かったから挫折したとか、そういうふうを考えます。しかし、一歩一歩カタツムリのように登っていけば必ず頂上に到達したはず。「距離＝速度×時間」なのですからね。

私は挫折の理由を「なかなか到達すべき頂上を見ることができずに、変わらない光景に耐えられなくなったから」と考えます。十歩でも百歩でも千歩でも、目の前の光景に変化はなく、頂上ははるか雲の上です。次の一步を踏み出したとしても何も変わらない。あと百歩頑張っても頂上までの距離に変化はないように思える。「いや、着実に頂上に近づいているではないか」と言われても、そこに到達するまでにかかる時間を考えて「私には」無理だと思ってしまうのです。

これが人間の弱さだとすれば、どうすればいいのでしょうか。あるマラソン選手が「次の電信柱がゴールだと考え、それを繰り返す」と言ったように、うんと身近な目標を設定して、それを繰り返すという方法もあるようですが、私の考える挫折しない方法は二つです。一つは登山を好きになること。それには低い山をのぼって頂上に達する経験をする。もっと高い山を登れば頂上からの景色はその分だけ美しい、それを見たいと思うようになることです。そうなれば登山が好きになります。山登りの好きな人は頂上に到達することも喜びでしょうが、歩くこと自体に喜びを感じますから、目の前の変わらぬ光景に耐えることができます。そして、もう一つ。それは仲間と登ることです。自分の百歩前を歩く人もいれば、五十歩後ろを歩く人もいます。はるか上にいて、小さい後ろ姿の見える人がいる。少し後ろで休憩している人がいる。自分一人だけではなく彼らもまた、まだ道の途中にあり、同じ岩だらけの光景を見て、それに耐えている。その感覚が自分を挫折から救ってくれると私は信じています。

今週のおすすめ

・南 伸坊 監修 『私が聴いた名講義』（一季出版）

小中高で12年、大学を合わせると学校教育は16年間。その間私たちは様々な先生と出会い、様々な授業・講義を受けることになります。著名な方もマイナーな方も合わせて60名が、思い出に残る先生の授業について書いています。むしろ記憶に残る先生について書いてあると言った方が正確ですかね。今から何十年も前の先生方の授業に私は大いに興味を持ちました。図書館に入れますから是非読んでごらん。

私自身は、遠藤周作の言う遅熟児（早熟の反対、遠藤さんの造語）だったようで、小中高と記憶に残る先生も感動した授業もほとんど記憶にありません。小5の時女の先生に廊下でビンタされたこと、小6の時音楽の先生にシンバルで殴られたこと、そんな光景は覚えています。中高ではクラブの試合は割と鮮明に覚えているかな。

大学に入っても相変わらずの遅熟で、何を理解するにも人の2倍はかかったけれど感動する講義には数多く出会えたように思います。そういった先生方の言葉は今も忘れることができず、この通信にも書いています。ただ、憧れた先生に近づこうと勉強するたび己の非才に向き合わねばならず、苦しかったことを覚えています。白状すると、その苦しみは今もなお続いています。諸君にはもうすでに記憶に残る、自分にとって大切な授業があるかもしれないし、今はなくてもこれから出会うかもしれません。そんな出会いがたくさんあることを祈っています。

BGMは 森山直太朗 の さくら でした…。